

5 教育とは魂を育て、結ぶもの

「子どもがきらきら輝いていない。深く関われば、その子が立場を自覚し、差別と闘える素地があるのに、なぜ、傍観し放置しているのか」これは、昨年（2022年）の1月に亡くなった東京都同和教育研究協議会事務局長であり、都立南葛飾高校定時制教諭の桐畑善次さんが、亡くなる少し前、体調が本当に厳しい中、他県の人が書いたあるレポートを読み、居ても立ってもいられない思いで大分県人教に電話をしてきて、話した言葉です。「子どもは深く関われば、きらきら輝き、きっと立ち上がっていきるんだ」という強い信念がそこにはあります。その桐畑さんは月刊誌「部落解放」への寄稿文「八年目の答辞」の中で、自身の取り組みを次のように書いています。

1970年代に入った頃から、南葛飾高校定時制（以下、南葛）の同和教育は取り組みが始まり、全国でも類のない「教員のための学校から生徒のための学校へ」という学校改革を文字通り実践してきた。家庭訪問、職場訪問を繰り返し、長欠の生徒を教室に座らせ、また、警察、家裁、鑑別所、少年院と走り回り、「不良」の生徒たちを学校につなぎ止めていった。そしてとりわけ重たい生活史と生活現実を背負っている生徒たちを中心にしたクラスをめざし、全力疾走で日々の教育実践を先達たちは積み重ねていったのである。さらに、南葛では1983年には①入学するすべての人に門戸を開放し、退学処分は出さない（いわゆる「全入・無退学」） ②同和教育を学校の中心に据える ③生徒の生活土台を大切に、父・母の生きてきた道筋から子どもも教員も徹底して学んでいくこと、という3点の教育方針が出された。（中略）日常の一日一日は非常に厳しい状況がある。先が見通せないことも多い。それでもなお、生徒たちとの関わりの中から光を見だし、次の日を迎える。しかし、また次に新たな難題が・・・の連続であるが、私たちは「最後の砦」としての南葛の教育に誇りを持って日々取り組んでいる。（一部抜粋）

そして、その最後には次のように締めくくっています。

いま、南葛は「全入・無退学」をめざし、それを実現できる学校となってきた。そのことがまた若い教員たちを育てている。（中略）南葛は生徒にとって、とても温かい学校になってきた。でも、教員にとっては厳しい場所である。が、しかし、大きく成長できる学校である。きりはたぜんじ

「子どもたちにとって温かい学校」は、一方では「教員にとっては厳しい場所」であり、しかし、だからこそ教員が大きく成長できるんだと書いています。「最大の教育条件は教員」であり、厳しい実践を通して若い教員が確実に育っているという事実が、明るい教育の未来を示してくれます。

ひとりの教員との出会いが、子どもの中で大きな力としてずっと生き続け、前を向いて生きる支えとなることができたという事実、また、人が学ぶということはただ一片の知識を身につけるということではなく、生涯にわたって生き続ける魂を育てていくということなんだということ、次の電話は、私たちに教えてくれます。

東京から電話をしています。大分県人教のホームページを見て、桐畑先生が亡くなったことを知りました。（涙）20数年前に東京の荒川商業高校定時制を卒業したものです。当時部落研・朝文研の副部長をしていました。

私、桐畑先生から卒業式の答辞を書けてと言われて、何で私が書かなきゃいけないのかと反発しながら

らでしたが、それまでだれにも話したことがなかったこと、話そうとも思わなかったことなど、自分のことを書いたんです。小さいときの生い立ちから、いじめに遭っていたことなんかを書きました。当時、私はそんなことと向き合うことが出来ずに逃げてばかりで、そんな私に桐畑先生は「自分の気持ちを茶化すな」って言いました。私はみんなに自分のことを知られるのが嫌で、でも先生はそんな私のことをいつも気にかけてくれていて……。当時私は桐畑先生の気持ちが分からなくて、なんでこんなに自分にかまうのか、うるさいな、しつこいな、大嫌いだって思っていたんです。でも、本当はそんなに自分のことを気にしてくれる先生のこと大好きだったんです。先生がいなかったら今自分がこうして生きているかどうか分かりません。桐畑先生はそんな先生だったんです。そんな私でしたから、部落研に一度来てみないかって誘われ、あんまりうるさいから行ったら、自分と同じような悩みを持った生徒がたくさんいて、世界中の差別問題などを教えてもらったりしました。「じゃあどうしたらいい？」って聞くと、「向き合おうや」って先生は言いました。壁にぶつかるたびに私は逃げたけど、先生は私のことをけっして見捨てずに関わってくれました。「一番差別された人間が絶対に差別をしてはいけない」って先生から教えられたから、絶対に私は差別をしないと決めてこれまで生きてきました。私のことを見捨てないで、先生のことを「うっとうしい」とか、「あっち行け」とか言ったことを謝りたいです。（涙）いつもいつも反発していたけど、私のことを気にかけてくれていたこと、本当はとっても嬉しかったんだということを、そして「ありがとう」って先生に言いたかったんです。本当は私、嬉しかったんです。ただ突っ張っていただけなんだってこと先生に伝えたかったです。本当にあの先生がいなかったら、私はこの世にいなかったかもしれない……。自分をずっと責めて、何でも自分だけで生きて行かなきゃいけないなんて考えて、だからいじめられていても気づかないふりをして過ごそうとしていた、そんな自分を先生は見抜いていたんです。〇〇、〇〇っていつも私を呼んで、うるさいなあって……。むしがいいけど、いつも見捨てない先生がいたから、今私が生きていられているんです。「お前は逃げているんだ。前を向け。もっと自信を持っていいんだ。自分に自信を持て。」と先生は言うてくれました。あのでかい声で、もう一度「前を向け」「お前はもっと自信を持っていいんだ」って言うて欲しかった。（涙）

これまで頑張った人に向かって、「悲しい」だけで終わっちゃいけないんですよね。「お前、しっかりしろ」って言うてくれたことにどう報いるかですよ。善次先生に教わった荒川商業定時制は今年の3月に閉校しました。卒業の時に書いてもらったアルバムの最後に善次先生は「部落解放」って書きました。これが先生の願いだったんだと思います。私たちはみな同じ人間なんですよ！先生の思い、ちゃんと私の胸に届いていますよと言いたいです。私は差別が大嫌いです。あのとき素直になれずにごめんなさい。

「子どもたちに添う」ということがどういうことなのか、桐畑さんとこの子どもの姿から私たちは深く学ぶことが出来ます。「前を向け」「お前はもっと自信を持っていいんだ」と関わり続けた一人の大人の関わりや存在が、一人の子どもの心の中にずっと生き続け、なにものにも代えがたく大きな生きる力になってきたという事実は、まさに「教育は魂を育て、結ぶものだ」という事実そのものであり、教育の持つ大きな可能性を私たちに示しています。このように人が生きるということをささえるものが人権教育であり、だから人権教育はあたたかいのです。こんなあたたかい人権教育の実践が私たちの周りで大きく広がっていくことを望みます。